

(二)

若き日の思出

短編創作 四篇

才七

弟

才八

誤給

才九

気心

才十

歸外心

昭和四年
海之

短簾小説

林田香村

(第一)

雨空に入つて是初の雨が来

た。感謝祭の日には神々人

同り幸福を祀す。也見へ〜

曇つたのやで過いだ。夕前

期のおは一日還つては日の

かゝははさるゝにも方り細

雨の暖刺のすゑも雲し降リ

續いた。

かゝ降つちや仕事は出来

は也。雨あるたけ樹だ。

飲以吐き生すやゝにうぶや

くこ船ラツカにありあふ

鼻鳴を驚くも一た。

歸るう！ 歸つて

花へもやこ

とうも。食つてあ

送人へはうす

昔の男の人説

こころ果てやと

女臺

文臺

彼の聲は霧車の中へ始りけり

歌の續けた

彼は年々く前へえ寄る

夜通くあつて併に點もる

望んでかけぬ永路に付く事

は出来なかつた彼は此の

永に格別彼の心は格別

年月経過してあかす人の

美嫌々集つて行くあつた

ぬ梅園の傍を歩いた彼は

人一位善く傷つた少く

も月二万弗を越した月は無

かつた左へ彼は年々弗の

生命保険に付す日百弗位

の勘定を拂ふ以外に所金も

しつ所金もなかつた又彼

(佐藤書店作製)

了や至や頭カゝる海也在
中ハ時回五人の舌針知球毫
去圖人ハ賭球に無中に在
一母たハ二四に四五人勝を
下ハ一見ハ母在。片断ハは
中針糸とモ言ハスか夏産
持チ連中ハ頭を定セ合フニ
燦草の煙ヲ此仕事着の汗是也
ハ中ハわハ人ハ萬里ヨリ
ノカリトの上を、見メシ
勝負を争フニ母在、時反金
銭をかサツタヒ蓄金の眼
を向ケテ一たび彼は今月以
たり知ヒ忍ラタ余ヲ為人
數ハ知ルモ若クモ操リ過焼ソク
日白くモ古キと埃リ過焼ソク
圓カネ逃れヤラシ左。
おハ何處行ク
彼等ハ一人父用フ在。オ
君ハおハ親加ハハハハハハ

爰は随分おさへるたぢ

彼は自由^{じゆう}彼の腹^{はら}を敵^{てき}にたす

〜彼に腹^{はら}を^けする其男を節や

あし半分に心の^みは外^{ほか}に

吾妻女奴に誰か^たに^も贈^くる

いやがると思ひながら薄笑

〜士^しの^しは^し言^いつた^たとし

〜外に中やうと一た

おもしろい貸^かす人かた

彼を見上げ〜腰^{こし}掛^かけをさす

上りたがう。

今日^{けふ}は朝^{あさ}か^さう^う惨^{さん}な^なた^たい

〜頼^{たの}む^むやうに^に〜やう^う〜半

た。

〜人^{ひと}たに^に思^{おも}ひ^ひりや^や直^ちし

左^{ひだり}うとうかあ

歸^{かへ}つ〜モリ^り〜あ

けりや面白くはない

〜業^{わざ}に^に郎^{らう}ろ^ろ郎^{らう}ろ^ろ

彼	は	こ	ぬ	り	く	ち	代	見	し	こ	毛	指
極	勝	ち	つ	て	た	し	た	こ	見	こ	取	
つ	た	の	で	歸	り	し	や	う	こ	う	た	
か	し	た	か		其	男	は	う	し	こ	う	で
も	り	し	か	し	み	し	お	近	事	は	し	
た	か	又	腰	を	下	し	た		体	は	し	
又	つ	し	こ	外	に	を	た		永	に	は	
依	と	共	同	生	14	を	し	こ	居	る	や	
男	の	無	き	り	=	つ	三	つ	針	上	の	
前	田	お	一	生	題	命	10	イ	オ	ソ	ン	
に	整	中	し	こ	房	つ	た	体	が	紅	を	
用	け	こ	前	田	の	後	を	通	り	倚	和	
腰	を	下	ろ	し	こ		靴	を	脱	ぎ	か	
こ	う	た	ろ	こ	曲	後	お	た	こ	見	こ	
こ	う	こ	も	の	聲	心						
	こ	う	か	つ	兄	を	お	と	う	雨	が	
降	つ	た	ろ	こ								
う	し	降	る	も	降	る	ぬ	も	大	し	た	も
の	た	鴨	が	泳	こ	で	房	を	お	は	き	
彼	は	前	田	より	ず	か	高	か	か	こ		

本のてし4月程ばかり前か

う完き々呼おれん居た。同様

に彼も又利用を候爵乙呼心

友しゝ居たの新うた。ヒンカラ

時に候爵どうだ午後

はーあうかあ

あうあう

君は精々あう

僕は活動に心も行あう

例の活動かーはーはー例の

花の乙とああ

依は前田がうし給まへと言

はうとするやうな袖付を見

ゝあう

引う血を吐くもりた

血を吐く乙は悪臣を食人

心花かう古を遊お車の別様

は彼等申目の流行語たうた

彼は其友一夜通し花を遊人

たう夜友明叶も眼をたう国

腰になつた、彼は其時始め
て彼等の頭の上の意から射
し込んた陽の光りに注意した
瞬間、何くそこ思つて
金が無くてやれるか馬
鹿な博奕に知事な人へ云
ふ能ふ何處にある
彼は大聲に叫ぶた、
「もつともだ」と思つた、
握り又在奉旨の大股で用ひ
て油汗を流して息がつか
ない、彼は眼を覺ました、
自分の働事を待つてく上、
糸の聲だ、
「今は何時だ」
七時前だ、夕方の
付箋に行くと、
彼は報る足で集まり、眼を
すりながら席の上へおろ
そ、あつた。

秋會ル

何故會一日曜日に秋會

女よりか

合同秋會大今夜H.Y.呉

余却のミーン知た

そん方より良しけい早く歸

つて来ぬはス人お一

か夜運くお心過る事

来ぬ

弟山直心也へ行つた。自傷事

七事新めく新すししく復言

と若にガク~~ガク~~と~~バキ~~キ~~キ~~新了

と~~バキ~~おした。彼は~~バキ~~お雨父

降つてるのに笑ふ付てた

彼日起きたくならつた。一晝

交際のりつ腸胃等はお方少彼

の健康~~バキ~~も~~バキ~~を~~バキ~~の~~バキ~~病~~バキ~~勞々

した彼は病直つて又うり多

うつうした~~バキ~~は~~バキ~~くする

と直ぐ目も~~バキ~~ま~~バキ~~た。禁度

毎に今は何時だろうかと時
同ばかり交になつた。幾度
も幾度も時計を見た。彼は
十時前だ。一と思つて、第
はと考へた。さうした。体は
事事とのどろろ。事事は
又用けつた。一になつて居た。
未だ歸る人のた。云々
かゝる十時。一五時。用も
家へ遊びた。な。人。左
答は無うと思つた。彼は
さうして来た。
第の奴。歸つた。う。人。叱り
飛ばし。やうう。と。心。いた
而し。一方。自分の。晩。来。の。事
を。考へ。て。叫り。さ。う。した。
お前に。弟。を。叱る。事。な。ん
か。ある。もの。か。と。彼の。頭。の
上。に。何。物。か。知。る。事。な。い。と。居
る。や。う。い。何。と。言。つ。て。思。ふ。

うかゝれば言葉を見付け
のに昔一人だ。もし自分
は社心あるくもして手
に思ふは也あううあこ
既たり珍なりし左も
しも妙本を厚固に現也
重目左学生生活かゝる
乞路帰るゝ随落ゝも
そ人方てゝは、弟にふ
て、こも思はれた。あ
末者斜学生の十中八人
知るお知るおゝゝ一
に落ちゝ行く事を思つて
つゝ一た。國の友人
栗ふ日本の弟に姉一
中、あけあ末やう、女
女やあつた。彼は今
臨人ゝ末た是れ数斜の
生、生七、あ、昨日、彼
も卒業した。早く日本に

歸、こゝに努力した彼が、當時
を思ふた、今を人々理想は
彼の何處にあるう、あゝ
あつても毫毫彼の現在では
不可能の同題が、た彼は
途うに種々の途うに無異だ
つた
こゝに隨落したや何であら
おしまふだ
彼は取り手を廻るゝ二三
変交作の歩みと首を打つ振
つた
あゝ弟がけは、めゝも佳
のやうな多岐は、さした
たゝ
彼は心に、心研つた、而し
不完全な未同胞、此層の彼
の弟も、能くも善道に指導す
るには、途うに無異だ、た、彼
は、情けなく、た、た、自分、

是るあつた事
 不申
 友
 士
 といふ
 意
 志
 又
 いふ
 こと
 し
 其
 意
 に
 慰
 め
 ら
 れ
 る
 善
 か
 ら
 其
 意
 に
 身
 を
 持
 ち
 出
 づ
 し
 た
 の
 如
 く
 した
 熱
 う
 後
 悔
 の
 危
 又
 後
 の
 危
 又
 上
 に
 記
 した
 坐
 り
 有
 ら
 る
 好
 き
 な
 横
 筆
 も
 思
 は
 ら
 ず
 ま
 ん
 の
 り
 へ
 出
 づ
 意
 明
 了
 といふ
 意
 を
 見
 つ
 め
 る
 考
 へ
 た
 し
 心
 の
 意
 又
 心
 の
 上
 へ
 来
 る
 妹
 の
 意
 心
 の
 許
 け
 ら
 れ
 る
 事
 知
 け
 ら
 れ
 る
 人
 並
 に
 学
 校
 を
 卒業
 した
 後
 彼
 の
 弟
 は
 十
 一
 時
 の
 時
 彼
 の
 弟
 は
 十
 一
 時
 の
 時
 は
 段
 を
 付
 け
 し
 ぬ
 意
 に
 打
 ち
 付
 け
 ら
 れ
 た
 (完
 二
 二
 三)

短篇「誤診」

林田香村

短し秋の日は有事もあさず
過かやうとし終日降り續
りた雨は夜に入つても一層
降りしきまの斗で止みさう
にもあかつた。
薄曇くある街燈の下の新道
と底本る泥水を飛び散らし
て爆進する自転車^{サイクリン}の響^{ウツ}笛^{フエ}の
中^{ナカ}雨にもつ木^キの葉^ハは
ゆしや降りの中を歩いて雨
に濡れた彼は表^{オモテ}戸の前^{マエ}に立
つゝ外^{ソト}着^キを脱^ヌぎ方^{カタ}々^々と
／＼変^カ境^{キョウ}を見上^ミゆた^タの
心^{ココロ}は明日も又^{また}和^なむ
あつた^{アツタ}。永^{とこ}に^にあ
しゝ三^{さん}変^{へん}か^かや^やか^かや^や右^{みぎ}
の燈^{とう}手^ても過^すは^はい^いに見^みた^た。
鍵^{かぎ}の振^ふり^りにあ^あつた^た見^みへ^へと^と用^{よう}

ながった、まゝで今更けり。
さきよく呼鈴のボタンを皆
先き心續けざまに押し去。
彼は夜更けの表に立つて濡
木の上で気がつろろろと
来た。水の中は静かにとどろ
ろりして電燈も點く無き
った彼の良火已に燃つて居
る。さうかつた。ぐやがてあ
あてゝ起きゝ来るとしゝ裏
の足音々聞えた。
お歸りなさい。
お前を片手に抱いた彼は見
おひさ言つた。妻は病気の
盡心奉仕に~~あ~~スロロを突か
けゝ居た。
濡木つちまつて、舊電を
見た。
彼は妻を此の夜更けに抱き
したのを幾分気の毒に思つ

長のこ
寒うたう。そんあなり
いや。僕にかたあが床に入
れよ。又心も引つちや
こ~~う~~さかうた
と附け加へて毒の顔を見
良は彼の思ふに、か平吉め
陽気村に似て、晴々と顔
色を、一人居た。而し
紋は、霜入りはなと起て、
眠たうか。と余の氣に
もとめかた。
随分遠かたの、あし
さ(さ)侍つて居たの、お、こ
余の歸つて来たので、今
何人の番か。かりよ。
つうつ、一た。思つた、
か、呼鈴を、押したの、心、
リ、一、張、び、た、さ、た、あ、も、
何寺、僧、の、知、る、と、

飯女はさう言ひながら江戸に
 の上の時計を見え
 「まー十二時^{四時}過ぎたあ」こ
 小聲に驚いた風に飯の顔を見
 見た。其時飯女の顔は前上
 り雪白くやうに思へた。
 飯は少し力強く
 冷へるといふ人徳に外^毛
 布で寝衣をかきこ
 ゑ被つた
 黒髪を枕の中にくづめ、飯
 女は眠るうしろへ髪をか
 返りを打つた。其妻は飯
 は、今晩長はあつかぬの、お本
 めと何か知るお女に思へ
 笑ふとおめへ夏の方を見
 夜具の外に出る白く角を冷
 へては、いかにあつた。夜具の
 中に押し込められ、生きた

てゝか、電してゐる方々も
信群かに息する鼻や、紋が彼
女への結婚前彼の心をかき
札しに半ば用ひた紙や、薄
く化粧くつれをしただけを眺
め古ふくお本も眠るうへ
こ彼は意を無情に叩く音
と、耳から、眼を、あつた。
けれども、寝入る事は来なかつ
た。うとうとう一たびかゝる思
ふこそ更には又寝返りを打つて
枕の隅に雷聲に身を近付け、
は時けをすまぬ見られ、瞬目
とは加つたりし、彼の氣を
つかふかな、落々眠る也
な、夢つた

お、お前の方でも慧々つ
か、先づ其のあたりにあるや
つち、衣し、睡眠、林、木、草、花、

何處にも慧々

和名 鎌倉 佐々木 忠 一 左 幸 二

土
く
呼
子
す
前
は
方
く
く
ぬ
た

東京 池田 武 松 子 乃 仁

使は
~~成~~^せき
生
す
や
了
に
言
つ
た

可なり大を左聲

笑
 5
 思
 7
 乙
 言
 7
 乙
 毛
 坪
 本
 和

海
産
物
の
名

妻 18
妻 3
乃 3
靜 2
泣
々
古
力

[illegible]

段
人
事
や
う
ひ
す

由
今
先
主
お
右
左
外
歸
了

へ
 来
 へ
 時
 色
 方
 人
 へ
 も
 在
 か

[illegible]

今更
人な
云
た
る

二 姓 考

𠂇
 𠂈
 𠂉
 𠂊
 𠂋
 𠂌
 𠂍
 𠂎
 𠂏
 𠂐
 𠂑
 𠂒
 𠂓
 𠂔
 𠂕
 𠂖
 𠂗
 𠂘
 𠂙
 𠂚
 𠂛
 𠂜
 𠂝
 𠂞
 𠂟
 𠂠
 𠂡
 𠂢
 𠂣
 𠂤
 𠂥
 𠂦
 𠂧
 𠂨
 𠂩
 𠂪
 𠂫
 𠂬
 𠂭
 𠂮
 𠂯
 𠂰
 𠂱
 𠂲
 𠂳
 𠂴
 𠂵
 𠂶
 𠂷
 𠂸
 𠂹
 𠂺
 𠂻
 𠂼
 𠂽
 𠂾
 𠂿
 𠃀
 𠃁
 𠃂
 𠃃
 𠃄
 𠃅
 𠃆
 𠃇
 𠃈
 𠃉
 𠃊
 𠃋
 𠃌
 𠃍
 𠃎
 𠃏
 𠃐
 𠃑
 𠃒
 𠃓
 𠃔
 𠃕
 𠃖
 𠃗
 𠃘
 𠃙
 𠃚
 𠃛
 𠃜
 𠃝
 𠃞
 𠃟
 𠃠
 𠃡
 𠃢
 𠃣
 𠃤
 𠃥
 𠃦
 𠃧
 𠃨
 𠃩
 𠃪
 𠃫
 𠃬
 𠃭
 𠃮
 𠃯
 𠃰
 𠃱
 𠃲
 𠃳
 𠃴
 𠃵
 𠃶
 𠃷
 𠃸
 𠃹
 𠃺
 𠃻
 𠃼
 𠃽
 𠃾
 𠃿
 𠄀
 𠄁
 𠄂
 𠄃
 𠄄
 𠄅
 𠄆
 𠄇
 𠄈
 𠄉
 𠄊
 𠄋
 𠄌
 𠄍
 𠄎
 𠄏
 𠄐
 𠄑
 𠄒
 𠄓
 𠄔
 𠄕
 𠄖
 𠄗
 𠄘
 𠄙
 𠄚
 𠄛
 𠄜
 𠄝
 𠄞
 𠄟
 𠄠
 𠄡
 𠄢
 𠄣
 𠄤
 𠄥
 𠄦
 𠄧
 𠄨
 𠄩
 𠄪
 𠄫
 𠄬
 𠄭
 𠄮
 𠄯
 𠄰
 𠄱
 𠄲
 𠄳
 𠄴
 𠄵
 𠄶
 𠄷
 𠄸
 𠄹
 𠄺
 𠄻
 𠄼
 𠄽
 𠄾
 𠄿
 𠅀
 𠅁
 𠅂
 𠅃
 𠅄
 𠅅
 𠅆
 𠅇
 𠅈
 𠅉
 𠅊
 𠅋
 𠅌
 𠅍
 𠅎
 𠅏
 𠅐
 𠅑
 𠅒
 𠅓
 𠅔
 𠅕
 𠅖
 𠅗
 𠅘
 𠅙
 𠅚
 𠅛
 𠅜
 𠅝
 𠅞
 𠅟
 𠅠
 𠅡
 𠅢
 𠅣
 𠅤
 𠅥
 𠅦
 𠅧
 𠅨
 𠅩
 𠅪
 𠅫
 𠅬
 𠅭
 𠅮
 𠅯
 𠅰
 𠅱
 𠅲
 𠅳
 𠅴
 𠅵
 𠅶
 𠅷
 𠅸
 𠅹
 𠅺
 𠅻
 𠅼
 𠅽
 𠅾
 𠅿
 𠆀
 𠆁
 𠆂
 𠆃
 𠆄
 𠆅
 𠆆
 𠆇
 𠆈
 𠆉
 𠆊
 𠆋
 𠆌
 𠆍
 𠆎
 𠆏
 𠆐
 𠆑
 𠆒
 𠆓
 𠆔
 𠆕
 𠆖
 𠆗
 𠆘
 𠆙
 𠆚
 𠆛
 𠆜
 𠆝
 𠆞
 𠆟
 𠆠
 𠆡
 𠆢
 𠆣
 𠆤
 𠆥
 𠆦
 𠆧
 𠆨
 𠆩
 𠆪
 𠆫
 𠆬
 𠆭
 𠆮
 𠆯
 𠆰
 𠆱
 𠆲
 𠆳
 𠆴
 𠆵
 𠆶
 𠆷
 𠆸
 𠆹
 𠆺
 𠆻
 𠆼
 𠆽
 𠆾
 𠆿
 𠇀
 𠇁
 𠇂
 𠇃
 𠇄
 𠇅
 𠇆
 𠇇
 𠇈
 𠇉
 𠇊
 𠇋
 𠇌
 𠇍
 𠇎
 𠇏
 𠇐
 𠇑
 𠇒
 𠇓
 𠇔
 𠇕
 𠇖
 𠇗
 𠇘
 𠇙
 𠇚
 𠇛
 𠇜
 𠇝
 𠇞
 𠇟
 𠇠
 𠇡
 𠇢
 𠇣
 𠇤
 𠇥
 𠇦
 𠇧
 𠇨
 𠇩
 𠇪
 𠇫
 𠇬
 𠇭
 𠇮
 𠇯
 𠇰
 𠇱
 𠇲
 𠇳
 𠇴
 𠇵
 𠇶
 𠇷
 𠇸
 𠇹
 𠇺
 𠇻
 𠇼
 𠇽
 𠇾
 𠇿
 𠈀
 𠈁
 𠈂
 𠈃
 𠈄
 𠈅
 𠈆
 𠈇
 𠈈
 𠈉
 𠈊
 𠈋
 𠈌
 𠈍
 𠈎
 𠈏
 𠈐
 𠈑
 𠈒
 𠈓
 𠈔
 𠈕
 𠈖
 𠈗
 𠈘
 𠈙
 𠈚
 𠈛
 𠈜
 𠈝
 𠈞
 𠈟
 𠈠
 𠈡
 𠈢
 𠈣
 𠈤
 𠈥
 𠈦
 𠈧
 𠈨
 𠈩
 𠈪
 𠈫
 𠈬
 𠈭
 𠈮
 𠈯
 𠈰
 𠈱
 𠈲
 𠈳
 𠈴
 𠈵
 𠈶
 𠈷
 𠈸
 𠈹
 𠈺
 𠈻
 𠈼
 𠈽
 𠈾
 𠈿
 𠉀
 𠉁
 𠉂
 𠉃
 𠉄
 𠉅
 𠉆
 𠉇
 𠉈
 𠉉
 𠉊
 𠉋
 𠉌
 𠉍

手
下
勝
を
方
々
へ
英
長
フ
跳
を

し
ろ
十
ノ
こ
フ
知
た
海
人
ヤ
リ
と

2	録
7	の
た	機
	12
	号
	一
	一
	書
	2
	号
	一

以

(佐藤書店作製)

彼は夏には大まゝ象親就を
数しただけで心遣いを起す

冷々とした

雨の中を車に抱へて人たふ

のそばで第び高き力へを

うぬに時折四しにうや

難く時等良の顔が腹に

こゆ本々来れは女が

うにしめると見ると友

つた、おけつとあうハ

4ををし一時片植に

落す、尻を奇麗に拭

るぬに尻に付う左

彼が背腰をし、事を

えりや大手術が

病院にやる癖に、角日本

人臨席を日本病院に

る直にし、もろつ、彼

終報も受け、日本病院に

ゆふた

一	日	も	つ	才	中	に	ろ	賜	り	し	か	居	=	少	さ	一	ぬ	彼
右	夏	言	く	也	込	も	わ	と	し	は	こ	る	三	少	う	さ	ろ	は
と	つ	な	つ	心	人	仇	あ	思	た	ろ	水	人	日	多	右	だ	し	は
起	還	あ	採	居	心	が	か	出		こ	こ	た	の	な	親	本	つ	は
き	た	た	は	る	心	氣	た	直	か	さ	夏	と	の	て	か	へ	夏	の
つ	骨	そ	入	し	心	休	市	は	び	交	の	忍	と	居	り	だ	變	日
右	菜	わ	強	の	を	無	常	と	い	弱	心	人	忍	た	し	い	に	未
	心	心	ク	心	う	し	の	黙	く	さ	根	こ	人	の	~	い	い	菜
	弱	歩	難	持	る	ほ	彼	居	な	ほ	の	こ	心	今	居	も	も	物
							女		右	ろ	の	電	心		て	ハ	ハ	十

彼女は左手を離し、指先と

〜市一左

を水でやわらかく削ると思

かたの力

つゝ、今あまたが醫、こ

から急に、左半身の

あやと、何とも無かつ

た。

でも三日前から少しは

痛みの痛みが、たのひ

~~あ~~のころ、居たは、心持

制束を脱ぎ、さうな事

は無かつたの

お前の云ふのは、方々、お

紙は、東の静、ソ、寝、同、言、の、上、あ

う下腹に手をあてて見た

あーん

彼は驚かされた、得た、あ、た

あ、お、様、左、お、あ

へ、面、白くもなう、雨、色、降、り、物、
 次、了、彼、は、氣、が、く、し、や、
 し、た、加、第、者、を、呼、お、外、に、
 法、や、な、か、つ、た、彼、は、受、部、機、を、
 取、り、上、げ、た、リ、ー、ン、
 了、第、は、用、へ、も、E、監、師、
 返、事、し、な、あ、つ、た、彼、は、は、か、
 中、く、思、つ、た、が、又、K、監、者、を、呼、
 人、な、う、く、う、鳴、つ、も、電、話、
 にも、な、か、つ、た、彼、は、氣、を、く、
 さ、う、一、た、又、た、め、か、い、の、監、者、
 も、以、の、監、者、も、雨、降、り、の、夜、更、
 け、に、あ、は、も、~~あ~~、あ、と思、ふ、と、
 こ、や、く、で、し、や、く、で、な、う、か、あ、
 う、た、裏、は、つ、た、う、た、し、く、苦、
 し、ん、へ、居、る、う、つ、お、さ、に、た、
 つ、こ、玉、臍、を、乳、房、の、向、の、処、に、
 合、も、再、生、を、其、物、~~せ~~、下、臍、を、
 柳、柳、へ、こ、彼、が、荒、足、く、還、つ、た、
 受、部、機、の、音、に、頭、を、お、た、や、た、

月夜の夜更けに井の西がや
 とこも寝落ちも来まりし又
 お前もこゝろ苦しきも無
 う古く夜明けを待たにや
 しやうが古く
 露草を呼お親を人かには
 けり古くおれと思つた父
 娘女は参り方ありた。娘は
 クツパル水と一杯と一色
 の湯着七持つて来古
 親お前を腰前七寢目看て包
 古かゝくつと飯人だ
 顔色お陰と思くなやに
 題、たふの夜更けに
 する事もあはれと女は
 古く娘女は親を上げ
 *
 何？
 下腹痛

又彼の~~現~~線に合ふと道は
古く本でワリに顔を伏せ
た。彼は白毛病院を呼出し
た。看護婦の聲が「~~た~~彼が
急病人だ」と断ると今日夕
は一人も見入って居りません
か」と言つた。彼は「何だ
と感付くたの」で仕方なく
「~~レ~~シロ」と言ふ。夕は「~~た~~
裏に用ゝ」で位に腹立ちま
本に咄人と呼ばれて
彼は投やうに「~~電~~転を
切ると
「おゝ甚だしいやうな其に
にハズはソロモ何でモ
つたけるんだ十分収めに
ある」
「あなたも一芝に」
「左に言ふ人があつた」
彼は彼女を左に向けると

病院事を待つた。彼は表の
 うに作さるゝ。あゝ止人
 心くねたる。祈るやうな
 塔ちに有つた。又近所の水
 皆口ツクリし。目覚まし
 る。事か。作断に。小
 半。だ。この空に思つた。
 心あつと。急性。白腸か
 も知れぬ。大きな。電
 機。の。機。の。頭。の中。に。明。め
 った。彼は。今。迄。裏。に。矢。を。振
 る。水。に。中。に。な。つ。た。の。如。馬
 電。の。一。に。持。に。首。鰐。に。を。め。こ
 し。き。つ。た。
 或。は。音。響。も。知。れ。く。た。
 彼は。能。女。の。顔。を。の。み。込。込
 て。良。を。は。け。ま。を。し。し。續。け
 九。言。つ。た。
 大。数。夫。が。お。や。用。さ。る。た。け
 心。に。配。さ。る。程。の。事。は。無。く

ニ 楷の / を 運本 ~ 行か
た 其 何處の 病院も 同
い か 知 ^{思ふ} 特に 等 品 の 喫 ^見 _心
何 _心 言 _心 ち _心 一 煙 の 店 院 特
有 _心 歟 _心 言 _心 あ _心 不 _心 然 _心 に _心
変 _心 左 _心 思 _心 息 _心 に _心 思 _心 は _心 本 _心 の 店 院 _心 現 _心
か 鼻 _心 に _心 っ _心 っ _心 た _心
彼 _心 は _心 肺 _心 の 息 _心 ち _心 かけ _心 っ _心 毛 _心 に _心 快 _心
く _心 方 _心 の 患 _心 者 _心 も _心 妻 _心 く _心 方 _心 け _心 断 _心 也 _心
~~あ~~ _心 へ _心 考 _心 へ _心 せ _心 る _心 小 _心 た _心
え _心 っ _心 思 _心 あ _心 へ _心 復 _心 の 顔 _心 に _心 不 _心 吉 _心 の
予 _心 感 _心 あ _心 表 _心 へ _心 小 _心 へ _心 居 _心 っ _心 や _心 っ _心 心
な _心 也 _心 臨 _心 院 _心 の 電 _心 燈 _心 は _心 へ _心 ぐ _心 左 _心 に _心
貧 _心 弱 _心 友 _心 の _心 へ _心 天 _心 井 _心 に _心 所 _心 け _心 付 _心
け _心 左 _心 活 _心 び _心 小 _心 左 _心 電 _心 球 _心 ち _心 見 _心 っ _心 け _心
~~あ~~ _心 っ _心 一 _心 た _心
鼻 _心 下 _心 に _心 薄 _心 の 隆 _心 へ _心 左 _心 髭 _心 ち _心 髭 _心 へ _心
左 _心 三 _心 十 _心 五 _心 六 _心 七 _心 一 _心 見 _心 思 _心 は _心 小 _心 子 _心
丁 _心 醫 _心 師 _心 へ _心 白 _心 衣 _心 ち _心 着 _心 方 _心 だ _心 っ _心 也 _心
か _心 へ _心 か _心 へ _心 入 _心 っ _心 へ _心 来 _心 っ _心 へ _心 左 _心

其後、箱の上に⁴にビーンと白布

を敷いた針櫃の看護婦が精

うそ来た

然、又醫師の言葉通り飲めを

ハ、力に、一、診察を待た

丁、醫師は飲め、^{状態}状況を一、

リ、用、一、珍事か、縫、と、何、

て、お、あ、う、も、あ、く、彼、を、あ、り、か

、う、

、^ひリ、や、急、性、を、^腸腸、一、寸、し、

、^切切、用、一、ま、し、う、^ここ、付、け、加

、^へた、^飯飯、^水水、の、顔、を、見、て、返、事、は

、^如如、何、^いい、ち、と、符、^うう、や、^うう、^東東、^友友、

、^おお、^いい、^様様、は、^彼彼は、

、^いい、^うう、^をを、^おお、^想想、^のの、^部部、^まま、^すす、

、^とと、^何何、の、^文文、を、^起起、^てて、^うう、^おお、^群群、^ああ、^はは、

、^答答、^うう、^たた、

、^オオ、^いい、^ルル、^くく、^スス、の、^勤勤、^きき、^つつ、^めめ、^たた、

、^手手、^術術、^はは、^おお、^おお、^変変、^にに、^金金、の、^御御、^意意、^をを、

言ふ一と驚く打つ箱の言と
昔に彼を陰交に一左醫者の
と言は特くに彼を^の鞭を金
鞭打つやうに痛くしく御言
ふた。彼は親方に逢ふ立ち
御うゝは彼を引きとる
やうと誘ひ了る^二人の看護婦^一
の代持を解し一嬉しうた
彼れも所を思ひ手術室
り上に覆ひた時は、お
り生既に毛^{スリマ}影が差し
たこ心甚しく^た熱の流る一極
古く、た顔を見わ^り目^のた
け然しく方^た元々^た付
けやうと窓側^に眠るや^と
陰昔は両盡機の蒸気の立つ
才^たの前の色々々入^る類
を^たか^たか^た
彼は今病に生と死の境に達
す

分少なくとも半塔回の
は~~変~~意~~義~~識の中に(運)命の神の
手に裁~~サ~~出~~カ~~か~~ハ~~お~~ハ~~た~~ハ~~ら~~ハ~~た~~ハ~~か
こ思~~ハ~~あ~~ハ~~こ~~ハ~~心~~ハ~~の~~ハ~~座~~ハ~~あ~~ハ~~ら~~ハ~~祈~~ハ~~りの
心~~ハ~~が~~ハ~~あ~~ハ~~り~~ハ~~こ~~ハ~~来~~ハ~~た
切用するには~~ハ~~立~~ハ~~意~~ハ~~人~~ハ~~如~~ハ~~入~~ハ~~る
こ~~ハ~~言~~ハ~~あ~~ハ~~の~~ハ~~こ~~ハ~~彼~~ハ~~は~~ハ~~あ~~ハ~~か~~ハ~~村~~ハ~~山~~ハ~~を~~ハ~~呼~~ハ~~人
こ~~ハ~~も~~ハ~~あ~~ハ~~り~~ハ~~こ~~ハ~~居~~ハ~~た
丁~~ハ~~醫師~~ハ~~は~~ハ~~分~~ハ~~解~~ハ~~の~~ハ~~臺~~ハ~~に~~ハ~~来~~ハ~~こ~~ハ~~切
リ~~ハ~~や~~ハ~~す~~ハ~~り~~ハ~~持~~ハ~~に~~ハ~~臺~~ハ~~を~~ハ~~取~~ハ~~は~~ハ~~した
香~~ハ~~雙~~ハ~~婦~~ハ~~は~~ハ~~二~~ハ~~人~~ハ~~こ~~ハ~~裏~~ハ~~の~~ハ~~の~~ハ~~部
迄~~ハ~~消~~ハ~~毒~~ハ~~し~~ハ~~こ~~ハ~~し~~ハ~~ま~~ハ~~あ~~ハ~~こ~~ハ~~前~~ハ~~持~~ハ~~り
こ~~ハ~~様~~ハ~~子~~ハ~~が~~ハ~~分~~ハ~~り~~ハ~~こ~~ハ~~居~~ハ~~る~~ハ~~こ~~ハ~~見~~ハ~~り
こ~~ハ~~夫~~ハ~~を~~ハ~~り~~ハ~~仕~~ハ~~事~~ハ~~を~~ハ~~待~~ハ~~り~~ハ~~し~~ハ~~り
轉~~ハ~~の~~ハ~~片~~ハ~~側~~ハ~~に~~ハ~~盛~~ハ~~有~~ハ~~毒~~ハ~~毒~~ハ~~の~~ハ~~前~~ハ~~に~~ハ~~立
り~~ハ~~た~~ハ~~道~~ハ~~に~~ハ~~た~~ハ~~家~~ハ~~に~~ハ~~忍~~ハ~~り~~ハ~~た
お~~ハ~~山~~ハ~~が~~ハ~~つ~~ハ~~あ~~ハ~~り~~ハ~~か~~ハ~~と~~ハ~~驚~~ハ~~に~~ハ~~こ~~ハ~~う
こ~~ハ~~来~~ハ~~た~~ハ~~ので~~ハ~~同~~ハ~~じ~~ハ~~に~~ハ~~来~~ハ~~ら~~ハ~~た
た
手~~ハ~~解~~ハ~~す~~ハ~~り~~ハ~~こ~~ハ~~う~~ハ~~こ~~ハ~~う

村山 ~~山~~ は 丁 醫 生 に 親 厚 を 授 け

る ~~と~~ 言 っ た 彼 は 日 々 う 左

川 へ 左 ~~を~~ 一 二

す ま な か っ た 感 じ ぬ け

こ

彼 又 言 っ た 兄 女 に お 少 は

入 口 を 見 っ た 心 づ ぶ り

肥 っ た ~~太~~ ^太 女 だ 顔 の 女 さ 黒

く 男 だ 入 口 に 走 っ っ た 昔 男 を

こ り 方 は 彼 の 友 の ヲ 博 士 だ

村 山 だ 召 今 ち ち ヲ 博 士 だ

彼 は 一 禮 し ぬ

あ ち ち の 女 士 へ

は あ ー

こ 小 井 下 七 人 寒 は こ の 方

か う 鈴 子 へ 依 頼 し ぬ ま し

一 甚 だ お 気 毒 だ ぞ

村 山 七 指 々 し ながら ~~お~~ 博 士

は 丁 醫 生 に 授 け っ た 何 と 七

市 村 山 言 を 残 っ っ 博 士 博 士

のこと七用天す彼女の側に
 来り下た。皆り傍七の手先
 せに片意一を丁脇師も
 側かろ見方ろん正
 夏は手術たと思つたのち一
 民〜丁載佐つちやつやち
 心脱聲七し何うた
 佐又(多)事とぬと夏は甲
 甲つやち、いやち和し切り
 たく方ろちりたく方ろ
 一と川くたこ下に花
 舗は親う〜、り傍七の回はあ
 子登^スに平文に眞答た。た。
 佐^彼中^はどうと切ろぬはとあ
 六ろあ〜居たろ何を困あ
 水〜毛ろろた、ちあつた
 月ろもろも矢つ張ろ
 年^あ人^かいし
 依りはろと思つたが要あを
 ねと方く靴ろ〜居た用り

寝込ニ三月無^つる^いじ

ハ^い一指先^きで右^{みぎ}下^{した}腹^{はら}を^を9

ニ^に4ヨ^よ共^{とも}揃^{そろ}へ^へながら

外^{そと}に^に変^かり^かり^りま^まえ^えか^かへ

別^{べつ}に^に変^かり^かる^る言^いつ^つて^てあ^あり

ま^まえ^えん^んい^いし^した^た必^{かならず}四^よ五^ご台^{だい}来^き

食^く事^{こと}が^が余^あり^り違^{ちが}ま^まう^うし^しか^かう

左^{ひだり}や^やう^うい^いす^す

エ^えう^うい^いす^すか^かえ^えん^んが^がけ^け用^{よう}け^けが^がた

く^くさ^さん^んい^いす^す場^ば七^{しち}は^は彼^{かれ}の

顔^{かお}を^を見^みる^るか^かう^う笑^{わら}顔^{かお}に^にあ

姓^{せい}嬢^{ぢやう}い^いす^すた

た^たが^が彼^{かれ}は^は笑^{わら}な^なか^かつ^つた

場^ば七^{しち}は^はお^お山^{さん}を^をあ^あり^り見^みる^る日^ひ

人^{ひと}が^が女^めと^とい^いふ^ふた^た下^{した}醫^い師^しの

た^たけ^けう^うや^やう^うか^かへ^へる^るの^の音^{おと}が^が

4^よし^しに^に中^{ちゆう}に^に佛^{ぶつ}堂^{だう}に^にた

何^{なに}い^い姓^{せい}嬢^{ぢやう}い^いす^す

下^{した}醫^い師^しが^がい^いふ^ふた^た後^ごに^に

下^{した}醫^い師^しが^がい^いふ^ふた^た後^ごに^に

ソ博士は看護婦に命じて注
 射器を揃つて来さるれた
 博士は筆を古く
 (第) 頁見たら
 ~ 首腸が
 しおれた夫人の持たれた
 の場合其見分けが困難に
 二 本は射するに
 外 和らうと見へ
 皆 外良く古く
 顔 も見へ
 へ 在
 彼 何とモ言へ
 嫌 に打たれ
 眼 の顔
 た 整
 外 見 彼は
 昨夜に

短篇小説 定心

井田中理

おむたうし、電話のベルが鳴

つた、おの思ふと、急にお母の女の

足音が一た、雪のほつきた聲で

ハイ、さようじ、さうます、

すまう、ごめつ、下さー

山野さん、電話よー

雪おは、お母が電話を耳にあ

かす、同じ卓に、お母、お母、目を

落し、お母、お母、お母、お母、お母

た、お母、お母、お母、お母、お母

日本生れの山野と、米国生れの

山野、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

お母、お母、お母、お母、お母、お母

[illegible]

山 野 子 公 叔 父 子 娘 子
左 方 子 妹 子 弟 妹 子

あ
ア
い
~~イ~~
う
エ
お
カ
キ
ク
ケ
コ

書よの
氣心が
解つ
〜
妻
フ
ム
ム

高
 一
 二
 毛
 吉
 野
 八
 人
 の
 花
 天
 一

方
 乙
 張
 順
 士
 乙
 子
 木
 土
 土
 久
 吉

撫
 書
 國
 集
 々
 の
 以
 の
 従
 往
 へ
 大
 婦
 へ

な
3
ぬ
ぢ
け
に
こ
ぬ
ぬ
か
な
て
ぢ
う
ゝ

所
幸
中
12
19/6
友
1
士

交流平
~
平
2
持
古
平
持
5
12
持
7
古

21
習
大
字
五
部
部
一
五
三
回
本

12
 陽
 2
 相
 宣
 玄
 4
 4
 3
 日
 本
 生
 4

の
教
育
の
女
を
選
び
た
と
す

かき
義理
は
自由
国
を
以
て
心
を

12
新
の
新
を
り
り
了
事
は
は

12
朱
未
加
丁
五
生
生
生

7
12
3
7
5
1
2
ヤ
4
1
4
2

山
都
の
心
は
花
然
た
り
~~さ~~
毛
や
9
京

雪の女 またろお中にたおつて
居た

「明夜 オエーに何もう雪や人

本言ー 雪村見 左、あめ

「雪や人 雪村娘さあ！ 抱えたい

知る人

山部は十二分雪よあ 心を引つて

喜ばれたい 借し仕事 雪子に

善い鐘をあげて 山部にはつと

一たかろ

「雪や人 一つ見一 も ^{新魔} あり

た、 左、 左、 左、 左、

雪子は取えミ山ヤンクをにばさすを

を上げし 山部に見一 下さし言

人ばかりに ^{身中} 動きをバーラッ

口で 4をを 陰を 見へた

山部は雪おに つろ 来て 懐かた

左、 万 休心 あう 左の ^{村中} あり

村中 雪村 女いた へーらに 何か

うとー たかあり 又つて 雪村に あり

た。

山
野
は
学
友
に
行
く
所
重
子
に
口

今夜の觀劇
妙事に付
て
言ふ
一
二

今
箭
と
置
つ
て
還
く
持
に
懸
か
う
に

思 7 亡 邦 2 1 七 七 銘 木 竹 子

教
如
人
一
雪
十
や
人
も
う
学
政

仁
竹
フ

左
？

心
田
フ
一
見
右
其
毫

未
刻
永
に
客
の
た
る
る
に
~~と~~
可
期
、
、

考
 古

妻の
う
に
行
つ
た
や
う

収
 丑
 〃
 聲
 の
 登
 ろ
 ん
 切
 ん
 あり
 の

聲大
大水
水
上
回
夕
一
七

叶
卷
四
十

おしや人

何
へ
~~や~~
あ
の
い

要
フ
ニ
今
後
如
！
其
如
の
モ

類
長
フ
ム
ミ
連
木
フ
行
フ
ニ
是
小
乙

言 爲 人 才 行 忠 孝 廉 義 忠 孝 廉 義

二

雪子は何にも
おまへ
3
12
~~4~~
)

長
山
野
親
を
採
り
て
木
を
う

3 わ / 2 見下ろした
 徒が 半生會の 醫者に すがりに
 1 下 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 さ 下 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 2 下 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 雪 5 や 人 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 半 長 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 人 加 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 山 精 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 白 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 毎 日 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 友 事 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 主 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 也 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 現 象 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 敗 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 血 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
 乙 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

顔のむくも雪の現像の
とるうーも雪や人雪の
とるうーも雪や人雪の

人だびは人食でこのまうー
見の人やありき人寄り生
りたさう

雪の生うーも雪の生うーも
此の人や解分あるさうーも
何んかう水を生すさうの雪
入用う雪

元心はがめ
すうう

山影は雪の交情を恵化よめ
さやうに思ふ水たのべし

たも思ふたうも何う

まも言あめ雪の二人はた
めも言あめ雪の二人はた

雪の生うーも雪の生うーも
思ふた

ぢや使等がけねや。お雪ぢや
 人、お寺長賢りに方解も二枚
 買つて来友さ。牛が、お。
 山野は二枚とワケも逢けにカ
 と入小た。
 エース
 雪子は情をひと親としな
 った。つてもお返しも
 知らず。雪子
 山野は雪子が好きで友の事は無
 か。お寺長賢りに方解も二枚
 買つて来友さ。牛が、お。
 山野は二枚とワケも逢けにカ
 と入小た。
 エース
 雪子は情をひと親としな
 った。つてもお返しも
 知らず。雪子
 山野は雪子が好きで友の事は無

かも必助あーア持女嬢に愛つ
へーまふた。二人は持申録に中
手左うゝ嬉内の日もさめた。
山郎は今夜元々観劇する方だ二
人、持事、雪子に愛に舞十やうこ
す。自分自身の心にも幸か不幸
な。山郎は電車に乗って一軒つきつ
た。女学生を見まわした。雪子は
善い女。民女かつた。乙女に似
の女学生も所々に居る。昔の持事
あうた。原道い。重垣心を考へて
つた。山郎は学校近しに下った。
のでもおき下にかけ、山がなか
う。つふやうな。
ふん。雪子の気心も十二分の
4。又めづる人だかし。
大陸の雪華から流れて来る。山郎
後頭を冷まし、蒼々たる山に入ら

一月五日

